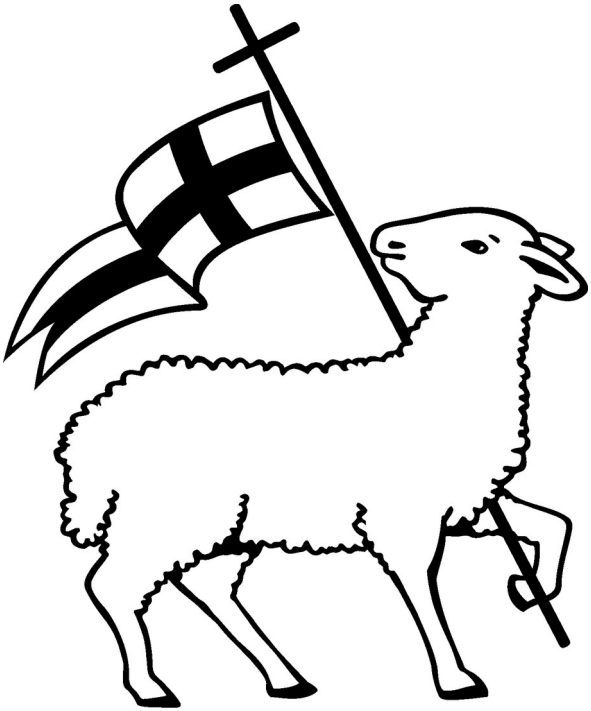
日々の聖句

４月　復活・昇天



『日々の聖句』の使い方

この冊子は聖書を読み、学び、黙想するための手引で、独立した読み物ではありません。かならず、聖書を開いてその日の箇所を読み、参照箇所も開くようにしてください。

聖書の黙想には、古代から「レクシオ・デヴィナ」という方法が用いられました。それは次の四つの段階を進んで聖書を読む方法です。英語の四つの「R」を意識するとよいでしょう。

一、読む（Read）心を静めてゆっくりと、何回でも、聖書を読みます。聖書は、神の言葉ですから、神が語っておられる声を聞くようにして読みます。

二、黙想する（Reflect）黙想は聖書との対話です。聖書になぜこのような言葉が書かれているのだろうか。それが自分にとってどんな意味があるのか、聖書に問い、聖書に答えてもらうようにして、その箇所の中心的な部分を思い巡らします。

三、祈る（Respond）この祈りは、黙想によって得られたことに対する応答の祈りです。それは悔い改めや行動に結びつく決心であるかもしれません。あるいは、まだ解けなかった疑問や解決していないことがらに対するさらなる求めであるかもしれません。それがどんなものであっても、正直に祈ることが大切です。

四、瞑想する（Remain）祈りに続いて、しばらくの間、神とのまじわりに留まりましょう。「黙想」は「聖書との対話」ですが、「瞑想」は「神との対話」です。神の臨在の中にとどまることによって、御言葉が血肉となり、祈りが生活の中で実現していきます。「瞑想する」ことは神とのまじわりに「留まり」、自分自身を神の手に「委ねる」ことと言い換えることもできます。

また、彼らの間で、自分たちのうちでだれが一番偉いのだろうか、という議論も起こった。（24）

弟子たちが「自分たちのうちでだれが一番偉いか」と議論したのはこの時がはじめてではありません。ルカ９・46～48で、イエスが「人の子は、いまに人々の手に渡されます」と言って、ご自分の受難を予告した後で、弟子たちはそうしたことを議論しました。ここでは最後の晩餐の時です。弟子たちは、自分たちの主であり、師であるお方が、もうすぐ十字架にかけられようとしているのに、同じ議論を蒸し返していました。彼らは、イエスがもうすぐ王となり、自分たちのそれぞれに位を授けてくれることを期待していました。そして、その時、だれが一番になるかを言い争っていたのです。誰もが「自分が一番」と言って、譲らなかったことでしょう。

確かにイエスはご自分に従ってきた弟子たちに報いを与えてくださいます。しかし、それは今すぐにではなく、イエスが王として再び世に来られる再臨の時です（ルカ22・28～30、使徒1・6～7、黙示録20・4）。その時まで、「偉い人は、一番若い者のように…上に立つ人は、給仕する者のように」（26節）なって互いに仕えあうようにと、イエスは教えました。それは、イエスご自身が「仕えられるためではなく仕えるために」この世に来られ、「多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために」（マルコ10・45）「苦難のしもべ」となって、十字架への道を歩まれたからです。

祈り　主よ。「しもべ」となって歩まれたあなたに倣い、あなたと他の人の「しもべ」として、生きることを、私たちにも教えてください。

しかし、わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくならないように祈りました。（32）

イエスは私たちが祈りを捧げる対象です。私たちは「主よ」と祈り、「イエスよ」と御名を呼びます。私たちがイエスに祈るのです。ところが、ここでは、イエスが私たちのために祈ってくださっていることが教えられています。他の人のために、また、他の人に代わって祈ることを「とりなし」と言いますが、イエスは、地上におられた時から弟子たちのために「とりなし」ておられましたが、天に帰られた後は、いっそう、地上の信仰者たちのために「とりなし」てくださっています。

この「とりなし」についてはヘブル7・25に「イエスは、いつも生きていて、彼らのためにとりなしをしておられるので、ご自分によって神に近づく人々を完全に救うことがおできになります」とあり、ローマ8・34には「だれが、私たちを罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしていてくださるのです」、第一ヨハネ2・1に「しかし、もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の前でとりなしてくださる方、義なるイエス・キリストがおられます」とあります。私たちは「主イエス・キリストの御名によって祈ります」と言って祈りを終えますが、そのとき、今、自分が祈った祈りがイエスの力強い「とりなし」によって、父なる神に届くのだということを確信するのです。

祈り　主よ。あなたの変わらないとりなしによって信仰が保たれていることを感謝します。

どうして眠っているのか。誘惑に陥らないように、起きて祈っていなさい。（46）

イエスが弟子たちと共に出て行ったのは、オリーブ山の「ゲツセマネ」というところでした。「ゲツセマネ」には「油絞り」という意味があります。この場所で、イエスは「血の汗」を絞り出して祈りました。イエスのふだんの祈りは、御父への信頼にあふれ、喜びに満ちたものだったのですが、ここでは苦しみ、もだえながらの祈りでした。それは十字架がイエスにとってどれほど重いものだったかを教えています。

この時、イエスは弟子たちに「誘惑に陥らないように祈っていなさい」と命じました。それは弟子たちに臨もうとしている試練に対する警告でしたが、同時に、「わたしと共に祈って欲しい」という弟子たちへの願いの言葉でもあったと思います。イエスは、私たちに、ご自分の苦難にも、喜びにも、忍耐にも共にあずかって欲しいと願っておられます。この時、目を覚ましてキリストと苦難を共にすることができなかった弟子たちは、後に迫害を通ることによって、キリストと苦しみを共にするようになりました。また、彼らは、キリストの苦しみだけでなく、栄光にもあずかる者となりました。ペテロは、そのことを次のように言っています。「むしろ、キリストの苦難にあずかればあずかるほど、いっそう喜びなさい。キリストの栄光が現れるときにも、歓喜にあふれて喜ぶためです。」（第一ペテロ4・13）イエスと苦しみを共にする時、私たちの苦しみもまた勝利と栄光に変えられていきます。

祈り　主よ。苦しみの中にある喜びを、私たちにも教えてください。

主は振り向いてペテロを見つめられた。（61）

イエスがペテロに、「今日、鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います」（ルカ22・34）と言われた時、ペテロは「たとえ、あなたと一緒に死ななければならないとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません」（マタイ26・35）と答えました。ところが、いざとなると、彼は人々を恐れて、「いや、私はその人を知らない」と、三度までも、イエスを否んでしまいました。しかも、大祭司の審問を受けているイエスを目の前にしてです。中庭での騒動は大祭司の方を向いて立っていたイエスにも感じられました。イエスは振り向いてペテロを見つめました。

ペテロは、勇敢にも大祭司の中庭まで入り込みましたが、彼の勇気はそれが精一杯でした。「おまえはイエスの弟子だろう」と迫られたとき、「私はイエスの弟子だ」と言い表す信仰の勇気がありませんでした。イエスがすでに指摘されたように、人間の勇気には限界があるのです。ペテロは男泣きに泣き、自分の弱さに直面しました。けれども彼はそこから立ち上がることができました。ペテロに向けられたイエスのまなざしは、ペテロを責めるものではなく、ペテロをいつくしむものでした。イエスはその時、「あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」（ルカ22・32）と言って、ペテロが立ち直ることも予告しておられました。神は回復の神です。イエスは、自分の無力を認め、あわれみを求める者に「立ち直り」を与えてくださいます。

祈り　主よ。あなたが私たちを「どん底」で支え、そこから引き上げてくださる「回復の神」であることを感謝します。

ほかにも多くの冒瀆のことばをイエスに浴びせた。（65）

最高法院がイエスに与えた罪状は「冒瀆罪」でした。イエスが自分をキリストとしたからというのが、その理由です。そこには「ナザレの大工の子が『神の子』であるはずがない」という先入観がありました。イエスがキリストである証拠は、その罪のない人格、真理の教え、あわれみの心から出て、聖霊の力によってなされた数々の奇蹟など、誰の目ににもあきらかなのに、自らを真と偽、善と悪、正と邪の審判官と自認していた最高法院の指導者たちには、それが見えなかったのです。だから、彼らは「神の御子」また「子なる神」であるイエスを「冒瀆罪」で裁いたのです。そして、それこそが最も大きな冒瀆であることに気付いていなかったのです。

私たちも、多くの場合、人をその外側で量ります。誰にでも愛想をふりまき、その場を盛り上げてくれる人であれば「素敵な人」ですが、信念を持って行動し、間違ったことに同調せず、それに「ノー」を言う人は「けむたい人」と見なされます。その人が神に対して誠実であるかよりも、人々に対して「ナイス」であるかで人を判断します。そんな基準から言えば、イエスは、いわゆる「ナイス」な人の部類には入りません。現代の教会でも、教会の主であるイエスがけむたがられ、片隅に追いやられ、人の顔だけが幅をきかせてはいないかと心配になります。私たちがイエスを裁く立場に立ってしまうという、逆さまなことがまかり通ってはならないのです。

祈り　主よ。あなたを裁くという最も愚かで、破壊的な冒瀆の罪から私たちを救ってください。

イエスは何もお答えにならなかった。（9）

イエスの身柄はユダヤの最高法院からローマ総督ピラトのもとに送られ、さらにガリラヤの領主ヘロデへと「たらい回し」にされました。彼はヘロデ大王の息子で、自分の兄弟の妻を横取りした人物です。その不義をバプテスマのヨハネから指摘されると、彼は、ヨハネを投獄し、最後には妻の言葉に従ってヨハネの首をはねました。イエスは彼のことを「狐」（ルカ13・32）と呼んでいます。その人格の低さ、生活の乱れ、そして性格の狡猾さを指して、そう言ったのでしょう。

領主ヘロデはイエスを見ると、非常に喜びました。人々がイエスをバプテスマのヨハネの再来であると言っていたので、かねてからイエスに興味があったからです（ルカ9・7〜9）。ヘロデはイエスに「さあ、何か不思議なことをやってみろ」と要求し、イエスを道化師のように扱いました。そして、イエスが何も答えないと、イエスを口汚くののしり、からかったうえで、ピラトのもとへと送り返しました。ピラトは、イエスに罪のないことを認め、なんとかイエスを赦そうと努力していますが、ヘロデには、そうした人間らしささえありません。

イエスに対してどう接するか。そこにその人の人間性が表れます。イエスに対して誠実で真実な人は、人に対しても誠実で真実です。もちろん、人間の誠実さや真実さは完全ではなく、限界がありますが、精一杯の誠実と真実をもってイエスに接する者は、その誠実さと真実を、イエスの力によって増していただけるのです。

祈り　主よ。私を誠実と真実をもってあなたに近づく者としてください。

けれども、彼らはイエスを十字架につけるように、しつこく大声で要求し続けた。そして、その声がいよいよ強くなっていった。（23）

イザヤ53・8に「虐げとさばきによって、彼は取り去られた」と預言されているように、イエスが受けた裁判は不法なものでした。総督が三度も「釈放」という判決を下したのに、人々が「十字架だ。十字架につけろ」と叫び続け、ついにピラトはその声に負けてしまったのです。これはまさに「人民裁判」です。「人民裁判」というのは法の定めによらず、集団の圧力による、私的な吊し上げやリンチのことを言います。そこでは何が正しく、何が間違っているかという論理はなく、「好きか嫌いか」という感情や「損か得か」という利害関係が基準となります。

教会でも、聖書はどう教えているか、神は何を望んでおられるかを、学びと祈りによって尋ね求めることをせず、多数が好むものを選び取ってしまうことがあります。教会が神から離れていくのは、最初は小さなことからです。しかし、その小さいと見えるものに落とし穴があって、教会はやがて大きく道をそれ、主のみこころを問うよりも人間の声に聞き従うようになるのです。ある新聞のコラムのタイトルは「民の声は天の声」という意味で「天声人語」と名付けられています。権力者に民の声を無視させないという意気込みをもって名付けられたのですが、教会では、民の声は天の声ではありません。神の声に聞かず、自分たちの救い主を死に追いやった過ちを犯さないよう、私たちも気を付けたいと思います。

祈り　主よ。私に、口をつぐみ、あなたに聞くことを教えてください。

「エルサレムの娘たち、わたしのために泣いてはいけません。むしろ自分自身と、自分の子どもたちのために泣きなさい。」（28）

十字架を背負わされ、刑場に向かうイエスの姿に心ある人たちは涙しました。私たちも聖書を読むたびに、「十字架のステーション」に加わるたびに、また映画で俳優が演じる姿を見てさえ、涙を流します。エルサレムの女性たちがイエスに同情を寄せた思いは身にしみて理解できます。

イエスは彼女たちの同情の心を退けたわけではありませんが、すでに予告しておられたエルサレムの滅亡を思って、人々に警告を与えたのです。エルサレムがローマ兵に取り囲まれた時、最後まで抵抗した人たちは滅びてしまいましたが、イエスの預言に従ってエルサレムを逃れた人々は自分の生命を救ったと伝えられています。ソドム滅亡の時、ロトは滅びから免れました。エリコの町が滅ぼされた時もラハブが救われました。神は厳しい裁きの中にも憐れみの道を作っていてくださるのです。都市は「女性」扱いされますので、イエスは自分のために泣いた女性たちをエルサレムに見立て、やがて来る裁きの中にも備えられる逃れの道、救いの道を教えようとしたのです。

その「救いの道」とは、十字架の道です。イエスは十字架の上で神の裁きを受けましたが、それは神の裁きの真っ只中に救いの道を開くためでした。イエスが「わたしが道である」と言われたとき、それは、十字架によって、ご自身が救いの道となることを指していたのです。

祈り　主よ。あなたは自ら裁きを受けて、救いをもたらしてくださいました。あなたの裁きと救いをしっかり見つめる者としてください。

「おまえがユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」（37）

「自分を救え。」これは、サタンの誘惑であり、この世の声です。イエスは荒野でこの誘惑の声を聞きました。四十日の過酷な断食のあと、サタンは「石をパンに変え、それによって空腹を満たせ」と言いました。「まず自分を救え」と言ったのです。しかし、イエスは、石をパンに変えて空腹を満たすことをせず、むしろ、自分のからだをパンに変え、それを裂いて人々に与え、人々の霊的な空腹を満たしてくださいました。

イエスには自分を救う機会が何度もありました。ゲツセマネの園でも、「みこころがなりますように」ではなく、「この杯をわたしから取り去ってください」とだけ祈り続ければ、十字架を避けることができたかもしれません。しかし、イエスは「わたしの願いではなく、みこころがなりますように」と祈って、自ら進んで父のみこころを受け入れました。イエスはユダの裏切りを予知していましたから、それから逃れることも、自分をつかまえにきた者たちから自分を救うことも、十字架からさえ、降りることもできたことでしょう。しかし、イエスは自分を救おうとはしませんでした。それは人々を救うためでした。

イエスは、「自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを救うのです」（ルカ9・24）と言って、私たちに同じ心構えを求めています。私たちはそれにどう答えるでしょうか。

祈り　人々は自己実現のために狂奔しています。そのような中でも、心静かにみこころに従うことを私たちに教えてください。

「すると神殿の幕が真ん中から裂けた。」（45）

神殿の聖所と至聖所の間には大きな垂れ幕がありました。至聖所は大祭司が年に一度だけ、贖いの血を契約の箱に注ぐ時にしか入ることが許されなかった場所でした。イエスの死とともに、その隔ての幕が裂けました。それは、大祭司であるイエスが、自ら犠牲の子羊となり、十字架という祭壇の上で自らを屠り、その血を至聖所に携えて契約の箱にそれを注ぎかけたことを意味します。

神はアブラハムに「わたしは、あなたの神、あなたの後の子孫の神となる」（創世記17・7）と約束し、イスラエルに「わたしはあなたがたの間を歩み、あなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる」（レビ26・12）と言って、彼らと契約を結びました。神は何度も「わたしはあなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる」（エレミヤ7・23）、また、「あなたがたはわたしの民となり、わたしはあなたがたの神となる」（エゼキエル36・28）と、契約を更新し、ついには、イスラエルだけでなく、イエスを信じる異邦人をも神の民に加えてくださいました。「あなたがたは選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神のものとされた民です」（第一ペテロ2・9）とある通りです。

イエスのからだが裂かれることによって、神への道が開かれました。その流された血がこの契約を確かなものとしました。聖餐でパンが裂かれ、杯を飲むたびに、イエスによって開かれた道を感謝し、それによって神に近づきたいと思います。

祈り　主よ。あなたの裂かれたからだと流された血によって神に近づくことができることを、聖餐のたびに深く覚えさせてください。

ここにヨセフという人がいた…（50）

自らの死を予感した諸葛孔明は、蜀軍に遺言を与え、孔明が生きているよう偽装させました。そのため魏の司馬仲達は蜀軍追撃の機会を失い、蜀軍は大きな損害を受けることなく自国に帰還しました。この故事から「死せる孔明、生ける仲達を走らす」ということわざが生まれました。このことわざは偉大な人物の威光はその死を超えて働くという意味で使われます。

イエスの死は、三国志の物語以上のものを人々にもたらしました。処刑を執行した百人隊長をはじめ、そこに集まった群衆、そして弟子たちの心を揺り動かしました。「イエスの弟子であったが、ユダヤ人を恐れてそれを隠していた」（ヨハネ19・38）ヨセフをも表舞台に引き出しました。ヨセフはユダヤ最高法院の議員でしたが、その立場が危うくなることを承知の上でイエスの遺体の引き取りをピラトに申し出たのです。ヨハネの福音書によれば、同僚議員であったニコデモもイエスの葬りのために没薬を持参しています（ヨハネ19・39）。彼らはイエスの死に心打たれた人たちでした。

イエスの死でさえ、このような影響力を持っていたのなら、イエスの復活はなおさらです。イエスの死から二千年以上たった今日も、人々がイエスによって変えられているのは、偉大な人物の威光が死後も残っているからではありません。今も生きておられるイエスのいのちと、栄光と力とが聖霊によって人々を動かし、世界を変えているからなのです。

祈り　主よ。あなたの死と葬りの中にも、あなたの復活の命と、その栄光を見させてください。

「あなたがたは、どうして生きている方を死人の中に捜すのですか。」（5）

人々は生きている方を死人の中に捜しています。聖書学者の中には、使徒たちが証しし、教会が告白してきた「イエス・キリスト」は歴史上の「ナザレのイエス」とは異なるものであって、「信仰」によって「脚色」されていない「素顔のイエス」を追求しなければならないと言う者もあります。しかし、イエスをユダヤの預言者、教師、また、理想を求めたために若くして命を落とした夢見る青年とするのは、結局のところイエスを過去の人、「死者」とすることになるのです。

説教者もまた、イエスの教えを教えとして語るだけで、今、ここに生きて、私たちと共に働いておられるイエスを示さないなら、聴衆は、イエスの物語を昔話のようにして聞くことで満足してしまいます。

礼拝が「わたしは初めであり、終わりであり、生きている者である。わたしは死んだが、見よ、世々限りなく生きている」（黙示録1・17）と宣言し、天の御座に着いているイエスを仰ぎ見る「天の窓」とならなければ、私たちは霊的には「生きているとは名ばかりで、実は死んでいる」（黙示録3・1）と言われるようになってしまいます。日曜日の礼拝、とりわけイースターは、過去のイエスを懐かしむメモリアル・サーヴィスではありません。生きておられるイエスから、そのいのちを受け、いのちの主に「アレルヤ」を叫ぶ時です。さあ、生きている方に出会うため、いのちの祭典にでかけましょう。

祈り　いのちの主であるあなたに出会い、あなたのいのちに与る者としてください。

わたしの手やわたしの足を見なさい。まさしくわたしです。（39）

イエスの復活を信じたくない人々は、「復活」を様々に「解釈」してきました。ある人は、イエスは本当に死んだのではなく、仮死状態であって、墓の中で息を吹き返したのだと言い、ある人は、弟子たちがイエスを慕うあまり、イエスの幻影を見たのだと言い、また、多くの人は、それは後になって作られた「神話」であると言ってきました。しかし、どの「解釈」も、封印され、番兵によって守られた墓が空っぽになったという事実を説明することができません。イエスの復活は長年経ってから語りだされたものではなく、それはすぐにおおやけに宣べ伝えられ、それを宣べ伝えている弟子たちに反対する人々でさえ、その事実を認めざるを得なかったものでした。

きょうの箇所は「復活」がからだを伴ったものであることを教えています。人は「からだを持った霊」であって、霊と体との分離が死です。死によってからだは朽ちても、人は霊として存在することは聖書が教え、どの人も直感的に知っていることです。復活とは、霊が、体に戻るということではありません。朽ちるべき体が朽ちない体となり、ふたたび霊に結びつけられる、それが復活です。イエスはそのようにして復活されました。そして、復活の体を弟子たちに見せることによって、復活が「朽ちるべきものが朽ちないものを着て、この死ぬべきものが死なないものを着る」（第一コリント15・54）ことであることを示してくださったのです。

祈り　主よ。私たちは「からだのよみがえり」を信じ、待ち望みます。

わたしについて、モーセの律法と預言者たちの書と詩篇に書いてあることは、すべて成就しなければなりません。（44）

ヘブライ語の聖書は「律法」「預言者」「詩篇」の順にまとめられており、「律法と預言者と詩篇」といえば、それは聖書全体を指しました。短く「律法と預言者」という場合も同じです。イエスは「律法と預言者たちの書と詩篇に書いてあることは、すべて成就しなければなりません」と言って、聖書の預言を解き明かし、聖書がどのようにご自分を証ししているかを使徒たちに教えました。使徒たちは、イエスの復活から昇天までの四十日間に聖書を学び、イエスこそ「モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方」（ヨハネ1・45）であるとの確信を得、キリストとその十字架と復活、また、罪の赦しの福音の「証人」となりました。

「使徒の働き」にピリポがエチオピアの高官に伝道したことが書かれています。エチオピアの高官は馬車の中でイザヤ書を読んでいました。それはイザヤ53章で、キリストの受難を預言している箇所でした。ピリポはその馬車に同乗して、「この聖書の箇所から始めて、イエスの福音を彼に伝え」ました（使徒8・35）。その結果、この高官はイエス・キリストを信じ、バプテスマを受け、自分の国に帰っていきました。その後、エチオピアはキリスト教国となりました。

私たちも聖書をキリストを証しするものとして読み、人々に聖書からキリストを証しする者となりたいと思います。

祈り　主よ。私たちの心をも開いて聖書を悟らせてください。

彼らはイエスを礼拝した後、大きな喜びとともにエルサレムに帰り、いつも宮にいて神をほめたたえていた。（52〜53）

復活から四十日して、イエスは雲に包まれ、天に昇っていきました。教会は、イースターから四十日目の木曜日を「主の昇天日」として記念してきましたが、近年は、その次の日曜日を「昇天主日」として祝うようになりました。

この日に私たちが覚えたいことは、イエスが「王の王」「主の主」として父なる神の右の座に着いておられ、そこで、天使たち、聖徒たち、またあらゆる被造物から「誉れと栄光と賛美」（黙示録5・12〜13）を受けておられるということです。人となり、しもべとなり、さらに犯罪人とされ、十字架で処刑されたお方は、今、もとの栄光の御座に着き、父なる神とともに崇められている「子なる神」であるというのは、まさに「信仰の奥義」（第一テモテ3・16）です。

弟子たちは、最初、イエスを「教師」として尊敬していました。しかし、イエスに従うとは、イエスを教師以上のお方、「私の主、私の神」（ヨハネ20・28）として信じ、礼拝することであることを知りました。私たちも、イエスを「教師」として尊敬する段階から、「私の主、私の神」として礼拝する段階へと導かれたいと思います。「主の昇天日」や「昇天主日」は私たちの礼拝が、父なる神とともに主イエスを礼拝するものであることを教えているのです。

祈り　主よ。あなたは父とともに礼拝されるべきお方です。礼拝のたびごとにあなたの栄光の御座を仰ぎ、あなたをたたえる私たちとしてください。

私は前の書で、イエスが行い始め、また教え始められたすべてのことについて書き記しました。（1）

「使徒の働き」は「ルカの福音書」と同様、テオフィロに献程されています。「使徒の働き」は「ルカの福音書」と同じ著者、ルカが福音書の続編として書いたものです。ルカが使徒1・1で言おうとしたのは、「この書では、イエスが使徒たちを通して、引き続き行い、教えてこられたことを書きます」ということで、この書物が福音書から切り離されたものでなはないことを強調しています。この書は、イエスの昇天後、使徒たちがどのように福音を伝えたかを書いているので、「使徒の働き」と名付けられてはいますが、実際は、昇天後も弟子たちと共におられ、ご自分のからだである教会を通して働いておられる「キリストの働き」を書いているのです。

マタイは福音書の最後に、「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」（マタイ28・20）というイエスの言葉を記し、マルコも、「弟子たちは出て行って、いたるところで福音を宣べ伝えた。主は彼らとともに働き、みことばを、それに伴うしるしをもって、確かなものとされた」（マルコ16・20）と書きました。マタイもマルコも、イエスが弟子たちと共にいて、教会を通して働き続けておられると言っていますが、ルカは、そのキリストの働きを、この書物で、具体的に書き著したのです。イエスの働きは地上のわずかな期間だけに限定されるものではなく、今も続いているのです。

祈り　主よ。私たちを、今も、私たちの中で働き続けておられる、あなたの力ある働きに目を留め、それに信頼する者としてください。

エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。（4）

イエスは昇天のとき、弟子たちに「行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい」（マタイ18・19）「全世界に出て行き、すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい」（マルコ16・15）「あなたがたは、これらのことの証人となります」（ルカ24・48）と言われました。しかし、全世界に出て行き、すべての人々に福音を伝え、キリストの証人となるには、聖霊の力が必要であり、それを受けるには、昇天からなお十日が必要でした。

弟子たちは、かつて、イスラエルの町々村々を巡って宣教活動をしたことがあります。その経験に照らして、そうしたことなら自分たちもできると考えたかもしれません。イエスから与えられた使命に、おそらく心おどる思いだったことでしょう。最終目標は「地の果て」（8節）ですが、目標が大きければ大きいほど、彼らは奮い立ち、イエスを見送ったあと、すぐにでもエルサレムで宣教を開始したいという気持ちになったかもしれません。しかし、宣教の働きは、人間の意欲や力でできるものではありませんし、人々がそれに成功して達成感を味わうためのものでもありません。それで、イエスは、弟子たちに「父の約束」、つまり、聖霊を受けるのを「待つ」よう命じらたのです。「待つこと」によって「力を受け」、「力を受け」て、はじめて「出ていく」ことができるという信仰の道を、弟子たちは学ばなければならなかったのです。

祈り　主よ。私たちにも、座して待つことと、立ち上がって出ていくことのふたつを、しっかりと学ばせてください。

あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。（11）

イエスの昇天によって、天に私たちの場所が確保されました。イエスは世を去る前、弟子たちに「あなたがたのために場所を用意しに行く」（ヨハネ14・2）と言っておられます。主の再臨のとき、信仰者はそこに迎えられるのですが（ヨハネ14・3）、霊的な立場においては、信仰者はすでに「キリスト・イエスにあって…ともに天上に座らせ」られているのです（エペソ2・6）。

また、イエスの昇天によって私たちはキリストの絶えることのない「とりなし」を受けることができます。地上で罪を犯さない者は誰もありませんが、私たちは、罪をを犯してしまった時も、天に「恵みの座」があって、イエスがとりなしておられることを知っているので、悔い改めてあわれみを求めることができるのです。ローマ8・34には、イエスのとりなしについて、「だれが、私たちを罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしていてくださるのです」という確信に満ちた言葉があります。

さらに、昇天は、再臨を約束するものです。雲に包まれて天に昇ったイエスは再び雲に乗って、栄光のうちに天から来られます。イエスは「万物が改まる時まで、天にとどまって」おられますが（使徒3・21）、やがて来られ、すべてのものを更新してくださるのです。

祈り　主よ。あなたを仰ぎ見るたびに、私たちに昇天がもたらす恵みを確信させてください。

彼らはみな、女たちとイエスの母マリア、およびイエスの兄弟たちとともに、いつも心を一つにして祈っていた。（14）

昇天の後、弟子たちは、イエスの言葉通り「父の約束」（使徒1・4）である聖霊を待ちました。しかし、ただ虚しく待ったのではありません。祈りつつ待ちました。しかも、別々に祈るだけでなく、一つ所に集まり、「心を一つにして」（同1・14）祈りました。

「心を一つにして」という言葉は新約で12回使われていますが、そのうち10回はすべて「使徒の働き」にあります。「一斉に」「そろって」「全会一致で」「一団となって」などと訳されており、それらはすべて、祈りに関係があります（使徒1・14、2・46、4・24、5・12）。弟子たちは、イエスの昇天からペンテコステまでの聖霊を待つ期間だけでなく、その後も、常に「心を一つにして」祈っていました（ローマ15・6）。彼らは、次のイエスの言葉を忠実に守ったのです。

「まことに、もう一度あなたがたに言います。あなたがたのうちの二人が、どんなことでも地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父はそれをかなえてくださいます。」（マタイ18・19）

二人が三人、三人が四人と、より多くの人が「心を一つにして祈る」なら、どんなに大きな主のみわざを見ることができることでしょう。「心を一つにして祈れ」という言葉を忠実に守って、祈りに励む者でありたいと思います。

祈り　主よ。私たちを、祈りのために集まり、集まったときには、常に心を一つにして祈る、「祈りの群れ」としてください。

だれか一人が、私たちとともにイエスの復活の証人とならなければなりません。（22）

ヨハネの兄弟ヤコブが、使徒たちの中で最初の殉教者となって以来、使徒たちは次々と殉教し、最後に残ったヨハネも一世紀末に世を去り、使徒の時代が終わりました。その後、使徒の補充は行われませんでしたが、教会の発足時には、きょうの箇所にあるように、欠けた一名の補充がなされました。教会は「使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられ」るので（エペソ2・20）、教会の始まりに際しては、その「いしずえ」となる使徒たちに欠員がなく、使徒の務めが十分に果たされる必要があったのです。

使徒たちは「復活の証人」でした。イエス・キリストを信じる信仰は、神がイエスを通して歴史の中に働いてくださった事実に基づいています。ですから、イエスの復活は、目撃者によって証言され、記録され、歴史の事実として伝えられる必要がありました。使徒たちは「復活の証人」となり、信仰を、復活という歴史の事実に基づくものとしたのです。

使徒以後のキリスト者は、使徒たちのように、復活したイエスに直接出会ってはいません。けれども、第一ペテロ1・8が「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに躍っています」と言っているように、復活の主を信じる信仰によって、今日のキリスト者も「復活の証人」となることができるのです。

祈り　主よ。私たちをも「復活の証人」として用いてくださる恵みを感謝します。

それなのに、私たちそれぞれが生まれた国のことばで話を聞くとは、いったいどうしたことか。（8）

聖霊は「風」の響きと「炎のような舌」の「しるし」を伴って、弟子たち一人ひとりの上にとどまりました。「風」と「炎」は、パプテスマのヨハネが「その方は聖霊と火であなたがたにバプテスマを授ける」（マタイ3・11、ルカ3・16）と言ったことの成就であり、「舌」は、このとき弟子たちが、すくなくても15以上の地域の言葉で語りだしたことに関連しています。これは、福音が全世界のあらゆる地域の、すべての人々に宣べ伝えられるようになることを示しています。

自分たちの親しんだ言葉で神の大きなみわざが語られるのを聞いた人々は、「私たちのことばで神の大きなみわざを語るのを聞くとは」と言って驚きました。この驚きは、そのあとに続く、ペテロの説教に耳を傾けさせるものとなりました。

しかし、弟子たちが語る外国語を理解しなかった人々は、「彼らは新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言いました。同じひとつの出来事を見ても、そこに神の御業（みわざ）を認める人々と、神の御業を「酒に酔う」という人間的なレベルに置き換えてしまう人々とがあります。神が働いておられる御業に目を留める者は、その御業を自分のものにすることができますが、その御業を認めようとしない人々は、神の恵み深い御業にあずかることができません。私たちは、神の御業、とくに聖霊の働きを軽んじることのないようにしたいものです。

祈り　主よ。あなたが私たちの目の前に描き出し、私たちの耳に語りかけておられることに目を閉じ、耳を塞ぐことがありませんように。

神が定めた計画と神の予知によって引き渡されたこのイエスを、あなたがたは律法を持たない人々の手によって十字架につけて殺したのです。（23）

「彼らは新しいぶどう酒に酔っているのだ」（使徒2・13）と言っていた人々に、ペテロは、ここで起こっているのは、ヨエル書に預言されている聖霊の注ぎの成就であると説きました。

それから、ペテロは、イエスのみわざと十字架、そして復活を語りました。それらはこの地で、ここに集まった人々の間で起こったことでした。人々は、遠い昔の物語を聞いたのではなく、それが起こってまだ二ヶ月もたっていないことについて、「このイエスを、あなたがたは律法を持たない人々の手によって十字架につけて殺した」と、その責任を問われました。また、「しかし神は、イエスを死の苦しみから解き放って、よみがえらせた」と、復活の事実を突きつけられました。人々は十字架と復活の出来事の前に立たされたのです。

キリストの十字架と復活は、今から二千年も前の出来事ですが、何年経とうとも、十字架と復活は、今この時の出来事として、私たちの目の前に描き出されています。それは、イエスを十字架に追いやった私たちの罪を問い、今も生きておられるイエスへの信仰を私たちに求めています。十字架と復活は、昔むかしの物語でも、カビの生えた教義でもありません。それは今も新鮮な「ニュース」であり、私たちに罪の赦しを与え、私たちを造り変える「福音」なのです。

祈り　主よ。あなたの十字架と復活の知らせを、常に、新鮮な「ニュース」として聞くことができますように。

ですから、神の右に上げられたイエスが、約束された聖霊を御父から受けて、今あなたがたが目にし、耳にしている聖霊を注いでくださったのです。（33）

ダビデの書いた詩篇にはキリストの預言が数多くあり、ダビデ自身もキリストの「雛型」でした。ペテロが詩篇16篇からキリストの復活を論じることができたのは、イエスが「わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就する」（ルカ24・44）と言って、弟子たちに聖書を説き明かされたからでした。ペテロが示した聖書の解釈は、彼自身のものでも、初代のキリスト者によって新しく作られたものでもなく、イエスご自身によって与えられたものです。ですから、私たちは使徒たちの教えを通して、イエスご自身の教えにさかのぼることができ、「これがキリストの教えである」と、確信をもって他の人に伝えることができるのです。私たちの信仰は、人間の教えによるものではなく、キリストご自身によるものだからです。

ペテロはまた、ペンテコステの出来事が、イエスが復活して神の右に上げられたことの結果であり、人々は復活と昇天の証拠を「目にし」、その証言を、今、「耳にしている」と言いました。今の時代にペンテコステと同じような現象が繰り返されることはなくても、信仰者の内に住む聖霊の働きやその実は「目にし、耳にする」ことが出来るもので、それによって、人々は「キリストが、今、生きておられる」ことを知るのです。

祈り　主よ。私たちが聖霊に生かされ、聖霊の実を結ぶことによって、あなたを証しすることができますように。

人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、「兄弟たち、私たちはどうしたらよいでしょうか」と言った。（37）

「このイエスを、あなたがたは十字架につけたのです」との言葉に、人々は心を刺されました。聴衆の中には、実際に、ピラトの官邸で「十字架につけろ」と叫んだ人もいたでしょう。その人たちばかりでなく、ユダヤの人々は、イエスを十字架に追いやったのは自分たちであったことに気付きました。

では、ユダヤ人でない人や、現代の私たちには、イエスを十字架に追いやった責任はないのでしょうか。いいえ。聖書を読む者は誰も、イエスを十字架に追いやったのは、その時代のユダヤの人々だけでなく、アダム以来のすべての人の罪であったことに気付き、「私の罪がイエスを十字架に追いやった」ことが分かるようになるのです。水野源三の詩に次のようにある通りです。

ナザレのイエスを
十字架にかけよと
要求した人
許可した人
執行した人
それらの人の中に
私がいる

そして、それに気付いて「私たちはどうしたらよいのでしょうか」と問う人には、「悔い改めて…バプテスマを受けなさい」という明確な答が与えられます。この言葉に従う者には罪の赦しと聖霊という最高の賜物が与えられるのです。

祈り　主よ。罪の赦しと聖霊を受けるため、私たちを悔い改めへと導いてください。

彼らはいつも、使徒たちの教えを守り、交わりを持ち、パンを裂き、祈りをしていた。（42）

「いつも…していた」と訳されている言葉には「専念する」という意味があります。使徒1・14の「いつも…祈っていた」、使徒6・4の「私たちは祈りと、みことばの奉仕に専念します」、ローマ12・12の「ひたすら祈りなさい」、コロサイ4・2の「たゆみなく祈りなさい」でも同じ言葉が使われています。この言葉は「祈り」との関連で使われており、初代教会がどれほど祈りに専念していたかを教えています。初代教会は祈りのほかに、「使徒たちの教え」、「交わり」、「パン裂き」にも専念しました。

「使徒たちの教え」とは「神の言葉」のことです。人は神の言葉を聞いて信仰に導かれ、救われ、養われます。「交わり」とは信仰者がひとつの真理や同じ希望に立ち、奉仕や労苦を共にし、ひとつの使命を果たしていくことです。「パン裂き」は聖餐のことで、聖餐は形に表された「神の言葉」です。それによって教会の「交わり」が形成され、それは、礼拝における最高の「祈り」でした。聖餐に使徒2・42は集約されています。

「教会でこんなことをして欲しい」という要求や、「教会でこんなことをしたい」という願望が数多くありますが、教会はそれらすべてを満足させることはできませんし、すべきでもありません。教会には、主が教会に求めておられること、教会でしかできないことがあります。教会は、それに専念することによって、託された使命を果たすことができるのです。

祈り　教会の主よ。私たちに専念すべきものが何であるかを教えてください。

信者となった人々はみな一つになって、一切の物を共有し、財産や所有物を売っては、それぞれの必要に応じて、皆に分配していた。（44、45）

ヨハネ9・22に「ユダヤ人たちは、イエスをキリストであると告白する者がいれば、会堂から追放すると決めていた」とあるように、キリスト者はユダヤの会堂から追放されました。キリスト者に対する圧迫はエルサレムでは特に厳しかったようです。「会堂」はユダヤの人々の共同体でしたから、そこから締め出されることによって生活が成り立たなくなった人たちが大勢出ることとなりました。それで、信仰者たちは財産や所有物を売って、その代金を教会に託し、貧しい人々を支えたのです。

後に各地に建てられた教会では、エルサレム教会と同じような制度は取り入れられませんでしたが、貧しい人々のための「愛餐」や、身寄りのないやもめをサポートすること（第一テモテ5・3〜16）、また奴隷の身分の人が、そこから解放されるための資金の積立てなどが行われていました。キリスト者は、霊的な面とともに実際的な面においても、互いに助け合ってきました。教会は、歴史を通して最大の福祉機関でした。時代とともに福祉は国家や自治体が担うようになりましたが、聖書に「ですから、私たちは機会があるうちに、すべての人に、特に信仰の家族に善を行いましょう」（ガラテヤ6・10）と勧められているように、福祉的な働きは、信仰のまじわりの中に、まだ多く残されているのです。

祈り　主よ。教会のまじわりの中で、具体的な助け合いが喜びと真心をもってなされるよう、助け、導いてください。

金銀は私にはない。しかし、私にあるものをあげよう。（6）

一世紀から四世紀のはじめにかけて、ローマ帝国から迫害を受けましたが、教会はそれを乗り越え、ついに信仰の自由を勝ち取りました。しかし、社会的な地位を確立し、財産や世俗の権力を持つようになった時、教会は、それと引き換えに、霊的な力を失っていきました。そんな時代の教会を、「金銀はあっても、イエス・キリストの御名を失った」と評する歴史家もあります。教会はそうした過ちを認め、信仰の回復を求め、改革と刷新を断行して、今日に至っています。それは教会がこの世に向かって、「金銀は私にはない。しかし、私にあるものをあげよう」と言うことができるためでした。しかし、今日の教会は、この世に対して「私にあるものをあげよう」と言うことができているでしょうか。

広い土地や大きな会堂、豊かな財政、優秀な人材、よく機能する組織、人々を満足させるパフォーマンス、そして、エンターテーメント。教会がそうしたものを神と人への奉仕のために活用するのは決して悪いことではありません。しかし、もし、教会がそうしたもの自体を目的にし、そうした面で、この世と肩を並べることを求めているとしたら、それは間違っています。教会は、この世のものをより良くして提供するところではなく、この世にないもの、「イエス・キリストの名」と、その恵みや力をこの世に与えるところだからです。

祈り　教会の主よ。あなたの名で呼ばれる教会が、あなたの御名が持つ救いの力を失うことがありませんように。

このイエスの名が、その名を信じる信仰のゆえに、あなたがたが今見て知っているこの人を強くしました。（16）

この奇蹟によって癒やされた人がペテロとヨハネの側にいたこともあって、大勢の人々がペテロたちのまわりに集まってきました。そこで、ペテロは、人々にイエスのことを、とくにその十字架と復活とを語りました。「聖なる正しい方」（14節）を罪に定め、「いのちの君」（15節）を殺した罪を「悔い改めて神に立ち返りなさい。そうすれば、あなたがたの罪はぬぐい去られます」と言って、人々に罪の赦しの福音を説きました。

この説教は、ペンテコステの日の説教とほとんど同じです。ペンテコステの日の説教も、この説教も、イエスが「キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、あらゆる国の人々に宣べ伝えられる」（ルカ24・46、47）と言われたことに基づいているからです。

また、ペテロがそのように福音を語ることができたのは、彼自身が「イエスの名による罪の赦し」を体験していたからでした。ペテロは三度もイエスを否みましたが、その罪を赦され、再び使徒として立たされました。それで、生まれつき足の不自由な人を立たせたのは「イエスの名」であると、ペテロは確信を持って言うことができたのです。イエスの言葉と、それを信じた自らの体験。このふたつをもって、私たちも確信をもってイエスのことを語りたいと思います。

祈り　主よ。あなたの御名をあがめ、あなたの御名に頼り、あなたの御名を伝える私たちとしてください。

この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。（12）

ペテロが宮で説教していると、宮を守っている祭司、守衛長、サドカイ人たちがペテロとヨハネを捕まえ、ふたりは、大祭司アンナスやカヤパ、また長老たちの前に引き出されました。アンナスはカヤパのしゅうとで、このふたりはイエスを裁いた人物です（ヨハネ18・13、24）。

この時ペテロは「この人が治ってあなたがたの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの名によることです」（10節）と言って、臆することなく、イエスの十字架と復活を語り、「イエスの名」を証ししました。

大祭司たちは協議の末、ペテロとヨハネに「いっさいイエスの名によって語ったり教えたりしてはならない」と命じましたが、ふたりはその命令を拒否し、「私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません」（20）と答えました。

ペテロはかつて、大祭司カヤパの邸宅の中庭で、人を恐れ、イエスを否みました。しかし今、同じカヤパの面前でイエスを証しし、「この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです」と語っています。「イエスの名」がペテロを変え、力づけたのです。

祈り　主よ。あなたの御名が、それを証しする者を強めることを信じて感謝します。

御手を伸ばしていやしを行なわせ、あなたの聖なるしもべイエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行なわせてください。（30）

釈放されたペテロとヨハネは「仲間」が集まっているところに行きました。この「仲間」とは「キリスト者」また「教会」のことです。ペテロとヨハネが宮で捕まえられたという知らせはすぐに教会に届き、教会は、ふたりのために、集まって祈っていたのです。後にペテロがヘロデ王に捕まえられた時も、人々はペテロのために祈りました。「こうしてペテロは牢に閉じ込められていたが、教会は彼のために、熱心な祈りを神にささげていた」（使徒12・5）とある通りです。

人々は、祭司長たちや長老たちが「いっさいイエスの名によって語ったり教えたりしてはならない」と命じ、脅迫したことを知ると、こう祈りました。「主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。御手を伸ばしていやしを行なわせ、あなたの聖なるしもべイエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行なわせてください。」（29、30節）弟子たちは、ユダヤの権威ある人々からの脅かしにひるみませんでした。状況が悪くなったからといって福音を語るのを控えませんでした。むしろ、大胆に御言葉を語り、「イエスの御名」によって力あるわざができるようにと祈りました。「イエスの御名」以上に権威ある名はないからです。私たちも、「イエスの名によって」祈りますが、その時、イエスの御名の力と権威を、本当に信じて、その御名を口にしたいと思います。

祈り　主よ。あなたの御名の力を信じて祈る祈りを、私たちにも与えてください。

特別の中の特別

見よ！と聖書が言うとき
これは特別な事
もちろん　聖書のおことばはすべて
特別な事で　決して通常な事
当たり前の事ではない

特別に偉大なお方の
特別なご存在とみ業が書かれてある

その中でもイエスさまの事は
特　特　特別な事だ
イエスさまの受肉　十字架　復活　昇天
普通はありえない
世にはないこの特別な事を

見ないわけにはいかない
見ることが許されている間に
見なくてはならない

そうしてこれを受け取り
自分のものにしなくてはならない
この特別な神の恵みを！

罪深い者が赦されるために
傷ついた者が癒されるために
心虚しい者が満たされるために
光のない者が光を得るために
迷っている者が見えるために
弱い者が強められるために
そうして幸いに生きるために

道

探していました
歩むべき道を
迷わずに歩いて
まっすぐに進んで行ける確かな道を

見つかりませんでした
親や師や友に聞いても
様々な書物を開いても
周りの人々の生き方を見渡しても
ほんとうにこれこそは
「歩いて行ける確かな道だ」と
思える道は　どこにもありませんでした

「わたしこそが道である」と言われる
イエスさまを信じて

はじめて知りました
これこそが私が探していた
私が迷うことなく　まっすぐに
歩いて行ける本当の道だと

この道を歩き始めて以来
ずっと　いつも確かでした
実に希望の道　実にに光の道
実に恵みの道でした

人となられた神の御子
人の罪を贖うために十字架の死を忍ばれ
復活して今も生きておられる救い主
イエスさまを信じて　従って行く道
決して変わる事のない
揺るぐ事のない　確かな唯一の道です

（T・N）

あとがき

主の助けと、皆様の祈りにより、ようやく、『日々の聖句』の一年分を書き終えました。昨年5月から年間購読を申し込まれた方には、今回が最後の配布となります。年間の購読をありがとうございました。このあと11月までは、昨年の分をくりかえしお使いください。（昨年12月から一年分を予約された方には続けてお送りします。）今年12月からの『日々の聖句』については、どのようにするかは未定です。ただ、来年の『レントの黙想』は、何人かの方々にお願いして作成するよう、準備しております。ご希望がありましたら、お知らせください。

いままでお届けしました一年分の原稿は、再編集して、年間を通して使うことができる「黙想の手引き」として、なんらかの形で公開したいと願っています。『我は信ず』（使徒信条の学び）なども再編集しております。準備ができましたらお知らせしますので、ご利用ください。また、Penguin Club と小冊子シリーズを、お知り合いに紹介していただければうれしく思います。

全能の神が皆様と共にいてくださいますように。

二〇二〇年三月

米国テキサス州にて

中尾フィリップ

Penguin Club
www.penguinclub.net